



編集後記

2025年以降の超高齢化社会を控え、日本はその準備に暇がない。

薬剤適正使用の動きが活発化してきている。これまでも7種類以上の処方せん料減額等の対応があったが、今回はポリファーマシー対策や高齢者向け薬剤適正使用ガイドラインの作成等、これまでより一歩進んだ対応が目立つ。10種類以上処方されている患者さんの薬剤を5種類くらいに減らしたところ、症状が改善して元気になったという話はよく聞く。今後数年で高齢者に対する薬剤使用方法が確立されていき、その結果として薬剤使用量は大幅に減っていくかもしれない。

「健康長寿」の動きも活発だ。健康診断の推奨など、病気の早期発見や重症化を防ぐ取り組みがなされてきている。しかし国保の被保険者の受診割合は相変わらず低い。会社に勤めていると年1回健診を受けることは普通だが、自営業の方や専業主婦の方はあまり健診に行かない。多くの方は病気がひどくなるまで受診しない。私の母もそうであるが、「健診に行ったら病気が見つかるのが怖い」と言う。また、好きな酒を飲み、好きなものを食べて、早く死んでも構わないと言っている人もいる。しかし重い病気になり、多くの医療費がかかれば自分だけではなく他の人に負担がかかることに気づいていない。日本人の一人ひとりが皆保険制度というものを、もっと真剣に考える時期に来ていると思う。

ジェネリック医薬品が今のように浸透していない時に、あるドクターがジェネリック医薬品を使用する理由を話してくれた。その地域では低所得の患者さんが多く、高い薬剤を処方すると患者が継続して受診せずに重症化してしまうので、患者さんの病気を治すためにジェネリック医薬品が必要とのことだった。ある薬剤師の先生も患者さんから経済的な理由で継続して通院することが出来ないと相談され、患者さんが継続受診できるようジェネリック医薬品を提案して非常に喜ばれたという。ジェネリック医薬品は患者さんの受診抑制をなくし、服薬コンプライアンスを改善し、それにより重症化を防ぐことで薬剤費だけではなく総医療費を抑制することが出来る「くすり」だ。

一般向けイベントの相談コーナーで「この薬はジェネリック無いの?」とよく聞かれる。患者さんもジェネリックの発売を待っているのだ。患者さんが望むジェネリック医薬品を速やかに発売し、将来に渡って安定供給していくことが我々の務めであるが、それを可能とする制度設計も非常に重要であると思う。

(T.K)

■編集

日本ジェネリック製薬協会
総務委員会広報部会

■発行

日本ジェネリック製薬協会
〒103-0023 東京都中央区 日本橋本町 3-3-4 日本橋本町ビル 7F
TEL: 03-3279-1890 / FAX: 03-3241-2978
URL: www.jga.gr.jp